Osaka University Knowledge Archive

Title	特集　世代と歴史学のいま ： 「世代と歴史」研究会より
Author(s)	戸渡, 文子
Citation	パブリック・ヒストリー. 2010, 7, p. 25-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66476
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Journal of History for the Public (2010) **7**, pp. 25-28 ©2010 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Does Generation Matter?: Papers from Generations and History Seminar
Ayako Towatari

特集　世代と歴史学のいま

「世代と歴史」研究会より

戸渡文子

特集「世代と歴史学のいま」は、2009 年 3 月から大阪や京都の研究者を中心に行っている「世代と歴史」研究会での報告のなかから、その一部を論文としてご紹介するものである。特集の前書きとして、以下では、この研究会の成り立ちと趣旨について簡単に述べたい。

「世代と歴史」研究会を始めた直接のきっかけは、3 年ほど前、阪大西洋史学の助手室で、ドイツの「68 年世代」に関心をもつ、当時は院生であった田中晶子と、「老人」を研究対象としてきた戸渡が、世代を切り口に新しい研究会を始めようと意気投合したことにある。その後、田中の働きで、ドイツ史、イギリス史、アメリカ史、ロシア史、日本学など、多様な領域から、個性豊かな研究者が研究会に参加することになった。メンバーでは、「ロスト・ジェネレーション」が多数派だが、「バブル世代」も含まれている。

世代は、歴史学ではけして真新しい分析概念ではない[(1)]。とくに、20 世紀以降、青年層が実際に歴史的に大きな影響力を及ぼしてきたドイツでは、世代史研究の蓄積は厚い。本研究会のメンバーである村上宏昭が述べているように、ドイツでは、最近でも世代を扱うことは学界においてある種の流行であり、「各年齢層の間に生じる微妙な行動様式のずれ」「時間軸に沿って区別されうる多様な社会化の在り方と、そこから生まれる行為形態の差異」に注目が集まっている[(2)]。

ドイツにおいて 1980 年代に世代史研究が爆発的に流行した背景には、60 年代の学生運動において先行世代を乗り越えた青年層を称揚するという、研究者の意図があったとも考えられる[(3)]。そのため、ドイツにおける世代史研究に特徴的なのは、村上がすでに指摘しているように、

(1) 日本西洋史学会や歴史学系の学術雑誌においても、最近になって世代についての特集が組まれている。たとえば、「「近代の知」をめぐるせめぎ合い――世紀転換期～戦間期の世代・ジェンダー・抵抗」、小シンポジウム IV、第 58 回日本西洋史学会、2008 年 5 月 11 日 ;「特集／歴史の中の世代」『歴史評論』第 698 号、2008 年など。
(2) 村上宏昭「ドイツ世代論の展開と歴史研究」『西洋史学』第 232 号、2009 年、44 頁。
(3) 2009 年 10 月 4 日の「世代と歴史」研究会における村上と田中のコメントより。

「青年研究」と言い換えてもよい偏重傾向が見られる点である。[4]

ドイツ史以外に目を向けてみると、世代を異なった視点から分析する研究が散見される。たとえばイギリスでは、1980 年代のサッチャー政権による経済・福祉政策に対する批判として老人史研究が進んだ。集団やカテゴリーとしての老人、あるいは年金制度を対象とするこれらの研究のなかでは、世代間契約、世代間公正といった概念や、生涯収入における世代間格差についての歴史的な検討も行われている。[5] さらにドイツ以外のヨーロッパでは、最近になってようやく、わずかではあるが、世代史と銘打った論集が出版されるようになった。[6] この動きは、21 世紀のヨーロッパ各国において、日本と同様に、世代間対立がきわめて重要な経済・社会問題として認識されていることと無関係ではないだろう。

しかし、世代は概して、階級やジェンダー、エスニシティといった概念と比較すると、研究者にとって扱いにくいという印象をもたれてきたことは否めない。[7] 世代という概念を用いた社会や歴史の分析が躊躇される要因の一つとして、5 通りあるとも、7 通りあるともいわれる、世代概念の定義の曖昧さが指摘されている。[8] 例をあげると、世代研究といえば、家族内の親子関係を対象とする場合もある。たほうで、経済学では、「現在世代」(「現時点で生存しているすべての個人」) と「将来世代」(「現時点よりも後に誕生するであろう全ての可能的個人」) が分析の対象となることもある。[9] 世代は、研究者によって様々に定義されるのである。

なかでも、イギリスの社会学者ジェーン・ピルチャーによれば、「コーホート」と「世代」とが、概念的に明確に区別されず、しばしば混同されることで、研究上の混乱をきたしている。コーホートは、同時期に出生し、共通に年齢を経る、人口統計上の集団を指す用語である。これに対して本来、世代は、子／親、若者／老人などの関係を指す、構造的な概念である。[10] たしかに日常的には、「○○年世代」という語は、コーホートの意味で用いられるのと同時に、その世代に属する若者を指す場合もある。しかし研究上は、コーホートと世代は、明確に区別する必要があるだろう。

このように、全体としての世代研究は、理論的なまとまりをもって行われてこなかったような印象を持たざるを得ない。そのなかで、ジェンダーについて行われてきたように、世代が歴史研究にとって有用な分析概念であることを主張することはかなり大きなチャレンジである。[11]

---

(4) 村上、前掲論文、50-53 頁。

(5) Paul Johnson, Christoph Conrad and David Thomson (eds.), *Workers Versus Pensioners: Intergenerational Justice in an Ageing World* (Manchester, 1989); Peter Laslett and James S. Fishkin (eds.), *Justice between Age Groups and Generations* (New Haven, 1992).

(6) Stephen Lovell (ed.), *Generations in Twentieth-Century Europe* (Basingstoke, 2007).

(7) *Ibid.*, p. 2.

(8) Claudine Attias-Donfut and Sara Arber, 'Equity and solidarity across the generations', in Attias-Donfut and Arber (eds.), *The Myth of Generational Conflict: The Family and State in Ageing Societies* (Abingdon, 2000), p. 2; 村上、前掲論文、44 頁。

(9) 宇佐美誠「将来世代への配慮の道徳的基礎——持続可能性・権利・公正」鈴村興太郎編『世代間衡平性の論理と倫理』東洋経済新報社、2006 年、258 頁。

(10) Jane Pilcher, *Age and Generation in Modern Britain* (Oxford, 1995), p. 5.

(11) ジョーン・W・スコット、荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』第 2 版、平凡社、1998 年、53-86 頁。

まだ前方には遠い道が続いていることを認めたうえで、私たちの研究会では、少なくとも、以下のことを前提としてきた。まず世代は、年齢の差異についての認識に基づいた社会関係を構成する要素であり、社会的、歴史的状況によって変化するものである。異なる時代や社会において、世代はどのように定義されていたのか、それぞれのカテゴリーは何を意味し、その意味内容は、どのように変化していったのか、が考察の対象となるだろう。さらに、実態をともなう集団としての世代は、どのように形成されたのか。また世代間関係は、何から何へと、どのような過程で変化したのか。こうした点を、それぞれの研究対象とする領域において、具体的に描くことが課題とされているといえよう。

世代が形成される要因として、世代史研究にいまなお強い影響力を及ぼす、カール・マンハイムによる世代論では、革命や戦争など、大規模な歴史的事件に重きが置かれる。同一の年齢集団に属するある世代が、歴史的な断絶をもたらすような事件を共に経験することで、共通のアイデンティティを形成し、先行する世代とは区別される行動様式や世界観を持つと理解されてきた。(12) しかし、世代が形成される要因はそれだけではない。第二次世界大戦後には、特定の商品やメディアの消費をとおして、世代が形成されてきたと論じられてきたが、その過程についても、より具体的な考察が必要である。(13)

世代が形成される場としては、労働市場における「若者世代」「老人世代」の区別化や、両者の関係の変化にも注目するべきだろう。(14) さらに、ジェンダー史研究は、「労働者」というカテゴリーの男性性を明らかにしてきたが、その「若者性」に対しては、ほとんどまとまった検討が行われてこなかったのではないだろうか。また、近代の国民国家については、しばしばその「若者性＝強さ、進歩的」もしくは「老人性＝衰え、保守的」の対比が語られ、このようなレトリックに基づいて様々な政策が提案・正当化されてきた。(15) 世代というレンズを通して、階級、ジェンダー、国民国家などの歴史的に重要な問題を見直す作業も、今後重要になってくると考えられる。

研究会は、始まってからまだ日も浅く、3 回の会合を持ったのみであるが、すでにいくつかの興味深い発表が行われている。今回の特集には、そのなかから、村上宏昭と森山貴仁の論文が掲載されている。村上論文は、ドイツにおける青年神話を対象に据えた従来の研究が、それを裏側で支えていたはずの非青年（つまり老人）の形象についてはほぼ等閑視してきたとの批判から、「青年の脱神話化」へ向けた試みの一環として、20 世紀前半のドイツ青年神話の中で「青年ならざるもの」が辿った変貌の軌跡を分析する。森山論文は、戦後のアメリカで広く読まれた『スポック博士の育児書』を対象に、当時の社会変動と関連させながら世代言説を分析しよ

(12) 村上宏昭「「世代」概念をめぐる一考察――世代史研究の拡張へ向けて」『歴史家協会年報』第 3 号、2007 年、55 頁。

(13) 同、59 頁。

(14) Martin Kohli, ‘The problem of generations: family, economy, politics’, a public lecture delivered at Collegium Budapest, November 1996, p. 2; Attias-Donfut and Arber, *op. cit.*, pp. 2-5.

(15) Pat Thane, ‘Generations in Twentieth-Century Britain’, in Lovell (ed.), *op. cit.*, pp. 193-99; 村上宏昭「ドイツ青年神話と《青年ならざるもの》――その変貌の軌跡」『パブリック・ヒストリー』第 7 号、2010 年、29-43 頁。

うとするものである。なかでも、60 年代アメリカにおける「若者の細分化」という指摘は興味深く、今後の更なる考察に期待を持たせる。

様々な背景をもつメンバーが集う研究会をとおして実感することは、世代のもつ意味や、世代関係は、けして一枚岩ではなく、各時期、各国、各地域の状況によって、その成り立ちや在り方は幾様にも変化するものであるということだ。こうした世代の多様性を明らかにしていくことができれば、この研究会は成功するかもしれない。

＊これまでの研究会の参加者一覧 (2009 年 11 月現在)

乾　雅幸・岡内一樹・小山有子・田中晶子・戸渡文子・藤岡真樹・堀内真由美・
村上宏昭・森山貴仁